

VI 成果と課題

1. 千歳川水系における低湿部の遺跡調査とその意義

昭和50年代から現在まで、千歳川水系では木製品等の有機質遺物が検出された低湿部の調査が、数多く実施されている。ここでは、当報告のキウス5遺跡低位部の調査を含むこれらの調査を概観して、低湿部調査の意義を再認識してみる。

千歳川は、北海道一の長流石狩川の下流部における支流のひとつで、第I章4節(1)項で略記した石狩低地帯中央部を形成する主要河川である。支笏湖（支笏カルデラ）に源を発して東流、千歳市街で北に向きを変え、恵庭市・北広島市・長沼町・南幌町の停滞水域を蛇行しつつ、江別市江別太で石狩川に合流する全長約72kmの主流に、内別川（苗別川）・ママチ川・祝梅川・長都川・ユカンボシ川・ケヌフチ川・漁川・茂漁川（漁川支流）・柏木川（島松川支流）・島松川・音江別川（島松川支流）・輪厚川（旧島松川支流）・早苗別川などの大小の支流が流れ込む。干拓や河川改修以前は、長都沼などの大小の沼が天然の遊水池として流れに属し、馬追丘陵から流れ出る小河川もこの低湿部を形成する水系の構成要素である。夕張川も千歳川の支流であった。昔も今もサケの遡上する豊かな川である。

流域低湿地における遺跡調査は、江別市江別太遺跡の調査を嚆矢とする。この調査は、北海道縦貫自動車道建設に伴う緊急発掘調査で、高橋正勝氏を担当者として1978年に実施された。以後1990年代に入り、北海道横断自動車道建設に伴う発掘調査など当センターの大規模な調査で確認されたものが多い。以下、下流域から順に各低湿性遺跡の概要を記す（図VI-1）。

江別市江別太遺跡

石狩川合流点から上流3kmの千歳川右岸、標高1～1mに立地。続縄文期中葉（2～3世紀）の低湿性遺跡。河川堆積層から築のような漁獲施設状に立杭や木材が検出され、その数は約2,000点に上る。その中にあかくみや櫂といった舟関係製品や、銚・魚叩き棒・釣り竿？などの漁労具、篋・串・匙柄・ナイフ柄・石斧柄・柄などの調理・加工具、舟形・木胎漆器などの容器類、簪や機織り具部材？など漁労を中心とした生活用具が土器・石器とともに出土している。中でも木柄に石ナイフが装着されたままの道具が特徴的で、これら20点の木製品を含む59点が1993年、重要文化財に指定された。

文献：『江別太遺跡』1979 江別市教育委員会・高橋正勝「木製品」『縄文文化の研究7』1982 雄山閣・『江別文化の道具』1994 江別市郷土資料館

長沼町東2線南5号丸木舟出土地

千歳川中流域・旧夕張川下流域の氾濫原の沼地から、水田の暗渠掘削中に丸木舟が発見された。明治後期のものとみられる。両河川と流域の大小の沼は、交通路や漁労の場として少なくともアイヌ文化期から利用されていると考えられ、その延長線上にある丸木舟の出土であろう。

文献：由良 勇 1995『北海道の丸木舟』

恵庭市柏木川4遺跡

島松川の支流、柏木川の上流部右岸、標高44mほどの河岸段丘と氾濫原旧河道に広がる遺跡。氾濫原の本格的調査は2006年に実施された。縄文後期中～後葉とみられる旧河道から、自然木を含む木材類のほか舟形容器や槽状刳物・砧様槌などの木製品や赤色漆塗腕輪、多種の編み布の重なり・土器補

修孔に残る紐といった繊維製品が出土している。周辺部に限らず、全国的な比較資料として重要な遺物・遺跡といえる。

低位部文献：報告書作成中。『調査年報19』2006（財）北海道埋蔵文化財センター

恵庭市カリンバ遺跡（旧カリンバ3遺跡）

小支流カリンバ川右岸の標高25mほどの低位段丘面にある遺跡。縄文～アイヌ期の複合遺跡だが1999年の調査で、縄文後期末（約3,000年前）の土坑墓群から100点を超す漆工品や数多くの玉類が検出されたことで話題となった。低地部の調査は、史跡指定に向けた、遺跡の全貌を捉えるためのトレンチ調査で、2002・2003年に実施された。木製品の出土はなかったが、縄文後期末～続縄文初頭の土坑・礫群などの遺構や土器・石器・玉類・自然木が検出され、赤色漆塗腕輪の漆膜部分も確認されている。赤色顔料の広がりやそれを磨り潰した板状礫も検出されており、漆工に関わる場所の可能性もある。遺跡は2005年、国指定史跡となった。

低位部文献：『カリンバ3遺跡(3)』2004 恵庭市教育委員会

千歳市ユカンボシC15遺跡

長都沼の停滞水域に流れ込むユカンボシ川かその分流の最下流域低位段丘と低位部に広がる遺跡。旧石器～アイヌ文化期の複合遺跡で、低湿部は標高7.5m以下に発達する泥炭層になる。1996～1998年に北海道横断自動車道建設を原因として発掘調査された。泥炭層から主として擦文・アイヌ文化期の木製品や加工材が12,000点近く出土し、下層部の約13,000年前の恵庭降下軽石層（En-P）より下位から埋没林と旧石器が発見されている。主な木製品は、舟敷・舟縁材・舷側板・櫂・櫂受台・魚叩き棒・やす・矢・矢中柄・掛矢・斧柄・槌・柄類・作業台・楔・発火具・鉤・かんじき・下駄・編台・曲物・桶・漆碗・篋・箸・串・杵・イクパスイ・イナウ・建材類・樹皮製品などである。自家製品と交易品が混ざり合い、当時の生活と社会構成や変動を語る貴重な資料である。

文献：『千歳市ユカンボシC15遺跡(1)～(6)』北埋調報128・133・146・159・176・192 1998～2003（財）北海道埋蔵文化財センター

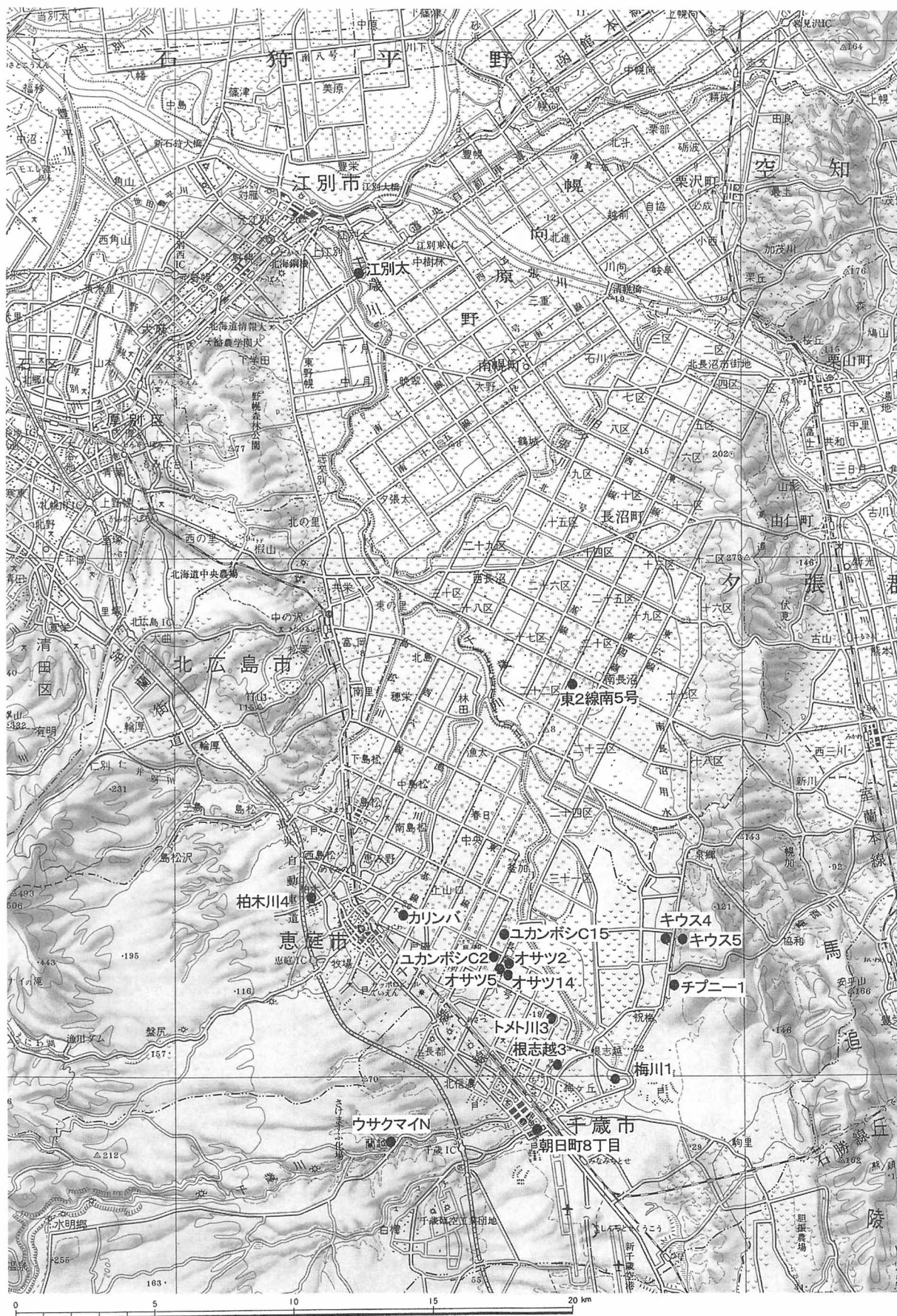
千歳市ユカンボシC2遺跡

長都川の左岸、合流か併流するユカンボシ川の最下流域低位段丘に広がる、縄文～アイヌ文化期の複合遺跡。標高8～9m付近に擦文・アイヌ文化期の遺構が密集する。河川改修や道路改良等が主原因で1969・1988・1989・1994・2000年と度々発掘調査が実施されている。低位部は2000年に調査された旧河道の縁部で、アイヌ文化期の所産とみられる数点の木製品が出土している。

低位部文献：『ユカンボシC2遺跡・オサツ2遺跡における考古学的調査』市文調報XXVII 2002 千歳市教育委員会

千歳市オサツ2遺跡

長都川下流域右岸の標高6～9mの低位段丘上に立地し、対岸にユカンボシC2遺跡が存在する。旧石器～アイヌ文化期の複合遺跡で、縄文～アイヌ文化期の遺構が密集する。1992～1994・1997～1999年に道路改良工事に伴い発掘調査が実施されている。低位部は1992・1994・1999年に調査された長都川旧河道部で、擦文・アイヌ文化期の木製品や加工材が多数検出された。主な木製品は、舟敷・舷側板・櫂・櫂受台・矢中柄・木鋏・槌・串・編台・曲物・桶・漆碗などで、縄の出土もある。



(この図は、国土地理院発行 6色刷 20万分の1地勢図「札幌」(平成8年修正)に加筆したものである。)

図Ⅵ-1 千歳川流域の低湿性遺跡分布図

低位部文献：『千歳市オサツ 2 遺跡(2)』北埋調報103 1996 (財北海道埋蔵文化財センター・「オサツ 2 遺跡」『市町村における発掘調査の概要 (平成11年度)』2000 北海道教育庁文化課・『ユカンボシC 2 遺跡・オサツ 2 遺跡における考古学的調査』市文調報XXⅢ 2002 千歳市教育委員会

千歳市オサツ14遺跡

長都川とその小支流エアニトマム川に挟まれた標高約 8 mの低位段丘上に立地する縄文中期と擦文期主体の遺跡。1994年の調査で、長都川の旧河道の一部を調査し、アイヌ文化期の串・杭等の木製品や割材など加工木材が53点出土した。

文献：『千歳市オサツ 2 遺跡(1)・オサツ14遺跡』北埋調報96 1995 (財北海道埋蔵文化財センター

千歳市オサツ 5 遺跡

長都川左岸の標高10mほどの低位段丘縁辺にあり、長都チャシを含んでいる。縄文中期と擦文期・アイヌ期の遺跡として知られ、鍋・兜・刀子・斧・鐔など金属製品も出土している。道教委の埋蔵文化財包蔵地調査カードによれば、湿地部に丸木舟が埋まっているという。

千歳市キウス 4 遺跡

キウス川が馬追丘陵を出て長都沼の広がる停滞水域に流れ込む地点周辺、右岸の低位段丘に立地。旧石器～アイヌ文化期の複合遺跡で、縄文後期後葉の周堤墓や盛土遺構を含んでいる。北海道横断自動車道建設地のインターチェンジ工区にあたり、1993・1995～1998年に計約50,000㎡の大規模な発掘調査が実施された。低位部は旧河道とその縁辺にあたり、標高 4 ～ 5 mにある縄文早期～前期の旧河道では杭や加工材、標高 7 m以下のアイヌ文化期旧河道では、樽側板・漆塗容器・篋・杭・建材類や加工材などが出土している。主体となる縄文後期後半の木製品・加工材には、脚付盆状容器・取手付大型槽・石斧柄・砧様槌 (キウス型木槌)・串・赤色漆塗鉢・赤色漆塗弓・杭・建材類が、繊維製品には笠状・簾状の製品があった。当時の生活や周堤墓との関係が深いものである。

低位部文献：『千歳市キウス 4 遺跡(2)』北埋調報124 1998・『千歳市キウス 4 遺跡(3)』北埋調報134 1999・『千歳市キウス 4 遺跡(4)』北埋調報135 1999・『千歳市キウス 4 遺跡(9)』北埋調報180 2003・『千歳市キウス 4 遺跡(10)』北埋調報187 2003・『テエタ12号』2004 すべて(財北海道埋蔵文化財センター

千歳市キウス 5 遺跡

当報告の遺跡。キウス 4 遺跡の上流部、馬追丘陵の端部に位置し、キウス川の右岸段丘面と旧河道低位部からなる旧石器～アイヌ文化期の複合遺跡。前述したように1994～1998年北海道横断自動車道建設を原因として発掘調査され、1 km以上にわたる緩斜面調査の結果、計約55,000㎡以上に手が付けられた。さらに国道337号の新ルート建設に伴い、これに交差・平行する部分の発掘調査が2003年から進行中である。低位部は旧河道とその縁辺にあたり、1994～1996年に上流部が調査された。2003・2006年には中流域にかかる部分を調査し、当報告に内容を示した。出土した木製品等は、上流域では主に縄文後期～晩期の砧様槌(キウス型木槌)・舟形容器・鉢形容器・柄・杭・加工材や籠状製品・赤色漆塗櫛などで、段丘上の集落や低位部の焼土群のあり方から、その近辺で製作・使用中されたものとみられる。中流域では、上記の槌や縄文早期の加工材・アイヌ文化期の鍬・杵・炉鉤・曲物・桶・大型剝物 (箕の未製品)・建材類・加工材などが河川堆積層中から発見された。また、平坦面から石狩低地帯で初めて近世アイヌ期の畑跡を検出した。

低位部文献：『千歳市キウス 5 遺跡 キウス 4 遺跡(2) ケネフチ 8 遺跡』北埋調報92 1995・『千歳市キウス 5 遺跡(3)』北埋調報115 1997・『千歳市キウス 5 遺跡(5)』北埋調報125 1998・『千歳市キウス 5 遺跡(8)』北埋調報251(当報告) 2008 すべて(財)北海道埋蔵文化財センター

千歳市チプニー 1 遺跡

チプニー川が馬追丘陵を出て長都沼の広がる停滞水域に流れ込む地点周辺、左岸の低位段丘に立地。旧河道からアイヌ文化期のものと思われる杭が出土。

文献：『千歳市チプニー 1 遺跡・チプニー 2 遺跡』北埋調報173 2002 (財)北海道埋蔵文化財センター

千歳市梅川 1 遺跡

2005年の部分的な試掘調査で、水漬き状態の試掘穴からアイヌ文化期と思われる木製品・加工材を検出。祝梅川とその支流梅川の流域にある遺跡群を構成する。2008年調査予定。

千歳市トメト川 3 遺跡

2001・2002年に千歳市教育委員会によって調査された縄文～アイヌ文化期の複合遺跡。小支流トメト川左岸の低位段丘（標高約 8 m）部にあり、長都沼のあった低湿地が眼前に広がっている。2006年には低位部が調査され、続縄文北大期の焼土検出や、その上層で擦文～アイヌ文化期の木製品が出土した。現在整理中である。

千歳市根志越 3 遺跡

1983年、日本海～太平洋の内陸交通路再現のため川下りをしていた帆船の乗員により、千歳川中流の左岸河川堆積物層で丸木舟の一部が発見され調査された。調査前後にも 1 kmほど下流の 2 地点で舟端部が発見された。いずれも上流から流され埋まったものが、流水により露出したとみられる。現地や周辺の状況から、1739年の樽前a降下軽石層に覆われた砂層から出土したと判断できる。樹種はヤチダモ・カツラと同定されている。

文献：田村俊之「千歳市根志越 3 遺跡調査概報」『北海道考古学20』1984・『北海道の丸木舟』1995 由良 勇

千歳市朝日町 8 丁目丸木舟出土地

1970年、下水道マンホール工事の掘削中、ママチ川氾濫原の泥炭層・河川堆積物層から一艘の丸木舟が発見された。河川堆積層を覆って1667年噴火の樽前b降下軽石層がみられ、350年ほど前の丸木舟と判断できる。長さ7.28m・巾57.5cmで樹種はセン（ハリギリ）であるという。

文献：佐藤一夫「ママチ川丸木舟遺跡発掘調査概要報告」『続千歳遺跡』1979 千歳市教育委員会・田村俊之「千歳市根志越 3 遺跡調査概報」『北海道考古学20』1984・「埋まっていた舟」『広報ちとせNo.761』1993 千歳市企画部広報広聴課・『北海道の丸木舟』1995 由良 勇

千歳市ウサクマイN遺跡

千歳市街地から約 5 km上流、内別川合流点の両河川に挟まれた氾濫原（沖積地）に立地する擦文～アイヌ文化期主体の遺跡。標高は25mほどである。1976・1994・1995・1999年と道路拡幅等により部分的に調査された。1999年の調査では、富寿神宝とオホーツク式土器の出土で話題となった。内別川の旧河道部も1999年に調査され、立杭11本で構成された擦文期の杭列が検出され、柄・矢・矢中柄・

小刀柄・容器底板・掛矢・杭等の木製品や割材・股木材など加工木材が出土した。

低位部文献：『千歳市ウサクマイN遺跡』北埋調報156 2001 (財)北海道埋蔵文化財センター

上記の遺跡では各々自然木の出土も見られたが、他に低位部や旧河道を調査したものの自然木しか出土していない遺跡には、ユカンボシ川河岸の恵庭市ユカンボシE3・E5・E7・E8遺跡や、千歳市チプニー2遺跡(チプニー1遺跡対岸)、同オリイカ1・2遺跡(オリイカ川旧河道)、同祝梅川小野遺跡(試掘)や梅川2・4遺跡(祝梅・梅川流域遺跡群)などがある。河川改修に伴う調査が多いため、自然木等の調査報告が無くても、恵庭市柏木川の河岸に当たる柏木川・南島松・西島松・中島松や恵庭・千歳両市のユカンボシ川河岸の各遺跡群の調査では、ほぼ全遺跡で低地部や旧河道の水漬き部調査を実施している。また恵庭市中島松7遺跡や茂漁5遺跡では、擦文文化期竪穴の柱穴から残存した柱材根部を検出している。

以上の調査例から導かれる千歳川水系、惹いては石狩川水系や北海道全域における低湿性遺跡の調査意義と課題を列記してみる。

① 漁獲施設

サケの遡上する千歳川の最下流部、江別太遺跡からは縄文期の漁獲施設が発見されている。これは石狩川水系における漁獲施設の発掘調査で、擦文期の札幌市サクシュコトニ川遺跡やK39遺跡北18条地点、旭川市錦町5遺跡、縄文中期の石狩市紅葉山49号遺跡に先行する調査であった。これ以降旧河道の調査では漁獲施設や護岸施設を意識して調査することが必要となったわけで、極めて重要な発見であった。

また、もともと千歳川は中下流域では長都沼・馬追沼・鶴沼などの大小の沼を繋げた停滞水域の川であった。その沼地を含む停滞水域には、キジ・ガン・カモ・ハクチョウ・ツルといった水鳥の飛来があり、水生生物にはスジエビ・モクズガニ・イシガイ・カワシンジュガイ・ヌマガイのほか食糧となるヒシが採集できプランクトンも豊富であった。魚類ではイトウ・ヤチウガイ・フナ・イトウオ・ゴリ・カジカ・ドジョウ・ワカサギ・コイなどが生息していた(元田 茂 1950「北海道湖沼誌」『水産孵化場試験報告5-1』など)。さらに千歳川の在来種にはサケ・サクラマス・ヤマメ・イトウ・ウグイ・エゾウグイ・エゾイワナ・アメマス・オショロコマ・カワヤツメ・ナマズ・コイ・ギンブナ・ドジョウ・フクドジョウ・エゾホトケドジョウ・エゾトミヨ・キタノトミヨ・トミヨ・イトヨ・ハナカジカ・アユ・ワカサギ・ヤチウガイがいたという(山本道也 1978「サケの来る川 千歳川の変遷とサケ文化史」『苗別川流域における鳥・魚類・植生調査』千歳市文化財報告Ⅱ)。豊富な魚類資源は鳥や他の水生生物ともども人々の生活を潤すに十分な価値があった。それを捕獲する施設は当然縄文時代から現代に至るまで設けられていたわけで、これらの内陸漁業に関わる遺構調査が今後とも千歳川流域で展開することを期待したい。また、出土する個別漁労具(ヤス・釜・手網など)との関連も見逃せない。

② 漆工作業場

1986・87年小樽市忍路土場遺跡の調査で証明された北海道における縄文時代後期の漆工品自家生産は、その後数々の発見で確固たる地位を築いた。なかでも恵庭市カリンバ遺跡の縄文後晩期の墓に副葬されていた100点を超える漆塗櫛・腕輪・带状品などは北海道漆文化の粋と言えるもので開花のピ

ークを思わせる。この漆工品の製作址を求めて追加調査した指定範囲調査では確たる証拠は出なかったが、対応する遺構は必ず存在する。忍路土場遺跡と忍路環状列石や、余市町安芸遺跡と八幡山環状列石など、漆工品製作址と副葬する墓が近隣でセットになっているとみれば、カリンバ遺跡はもちろん同市柏木東遺跡周堤墓や西島松2遺跡・同5遺跡の墓に入っていた漆工品製作址は柏木川流域の何処かにあり、数種の編み布類を検出した柏木川4遺跡などが候補にあげられよう。千歳市周辺でもキウスや美沢川兩岸の周堤墓に対応する漆工品製作址があるはずで、低湿性遺跡調査が実施される際には重要な留意点となる。とともに出土漆工品の精緻な分析も必要となる。

③ キウス型木槌

漆工品と並んで縄文時代後晩期で注目されるのは、所謂キウス型木槌である。V章の木製品の節でも述べたが、現在のところキウス4・5遺跡と忍路土場遺跡・安芸遺跡でしか発見されていない。キウスで19例中17例が出土していることと、ほぼカエデ材に限定された樹種選択が特徴的である。皮鞣しや繊維を敲いて軟化させる用途とみられている。「周堤墓・環状列石」や「繊維製品・漆工品」がキーワードになるように思われる。集団の系譜や集団間の繋がりを検討する上でひとつの要素となる。今後この低湿性遺跡で出土するのか注目したい。

④ 擦文～アイヌ文化期の木製品

低湿性遺跡といえば木製品のイメージが強く、事実多数の木製品が出土している。残されていた木材は自然木も含めて、当時の人々が生活を営むにあたって最も身近で利用度の高い材質である。木製品を個別・種別・遺跡・遺跡間で分析し比較検討することが、その遺跡の性格と変容ぶりを探る重要な手がかりとなる。特に千歳地域ではその大半が擦文～アイヌ文化期の所産である。スギやヒノキなどの本州産樹種の製品が混在し、漆塗椀が豊富なのも特徴的である。

千歳川は古来より交易の川であり、千歳地域は日本海側と太平洋側、道南・道央と道東部を相まみえさす交通の要衝である。千歳の背後には、太平洋側に開けて交易・漁労を行った港町で和人の出入りも多い美々8遺跡が控えており、近世には千歳川に会所が設けられ商業も発展した。その和製品の豊富さと再利用度の高さと自家製品の精巧さなどは、千歳川流域の先に挙げた諸低湿性遺跡を含め、今後の調査での比較試料が極めて豊富である。特に長都沼に面したユカンボシC15遺跡は、擦文人～アイヌが交易を交えた日常生活を営んだ遺跡で、出土した舟とその部材や漆塗椀はもっと広く世に知らされるべき木製品である。

⑤ 木製品の樹種同定

前項に示した木製品の比較検討を行う上で最重要な分析が樹種の同定である。樹種の判明は、製品が地場産か交易品か、製品ごとの樹種選定の度合いや有無がわかり、総合的に集落・地域・時間での変容とその事由を知る指針となりえる。自然木の樹種同定が進めば、自然環境復原や材質別利用頻度のより詳細なデータ収集ができる。

千歳川流域の調査では、低湿性遺跡や遺構炭化材の樹種同定が進展しており、ユカンボシC15遺跡の11,000件強をはじめとして約15,000件近い同定結果が得られている。さらに美々8遺跡などの美沢川流域の遺跡群や札幌市など道央圏のデータを加えると20,000件を超える。これらは全道分を含めて、「日本列島出土木製品データベース」として蓄積されている。今後ともデータの集積に努めたい。

⑥ 河川に残存する丸木舟

ユカンボシC15遺跡・オサツ2遺跡からは擦文～アイヌ文化期の舟敷が出土しているが、舷側板も同時に出土しており、板綴舟の船底とみられる。これより小型で河川や沼での漁労や近隣の集落を移動連絡する丸木舟も存在する。千歳川流域では先に挙げた如く、明治期のもも含めて6艘の丸木舟が発見されている。すべて工事などで偶然見つかったものがある。今後もこのような発見が多いものと思われるが、未発見の丸木舟が朽ちてしまわぬうちに早急に川岸などを探索する調査が必要である。

当国道337号建設工事でも今後は長沼町・南幌町方面の石狩低地帯滞水域へ進んでいく予定であり、千歳川洪水対策事業としての遊水池建設計画も進展していることから、発掘調査範囲外でも丸木舟が発見される可能性は高い。各方面で十分注意する必要がある。

⑦ 畑跡の検出

キウス5遺跡低位部の河川堆積上の平坦面で、畝をもつ近世アイヌ期の畑跡を検出した。洪水で薄く粘土を被りその上に1739年降下のTa-aが堆積したのと、河道が現流路に変わったため後の洪水や浸食からも守られ、発掘調査で姿を現わした。しかしⅦ章次節でも述べるとおりアイヌ期の畑には、畝建てをせず川岸近くの肥沃な土地に不規則な浅い穴を掘るだけの粗い農法も存在するようで、今後は畝の有無も含めて、低位部での畑の検出に留意しなければならない。また、擦文文化期の畑も未発見であるので、こちらの発見・調査も考慮が必要である。低平地に限ったことではないが、発掘調査に伴う表土・火山灰除去や調査区外の工事進行では、掘削の仕方によって畑跡が破壊される可能性もあるので慎重な重機操作や指示が求められる。

⑧ 埋没林と旧石器

ユカンボシC15遺跡では、恵庭a降下軽石堆積物の未風化軽石礫層（En-P）の下位まで深掘りをかけ、旧石器の試掘調査を行った。砂礫層・腐植土層・粘土層・シルト層が互層をなす中、腐植土層でグイマツとみられる埋没林を検出した。炭化物集中や黒曜石の石器類も出土し、1点は24,000～18,000年前と年代測定結果が出た。

この周辺では柏台1遺跡・祝梅三角山遺跡D地点・丸子山遺跡など古砂丘列下のEn-a層下位から同時期の旧石器の出土が知られている。地山面を浸食した河道壁や河床部の調査では、埋没林や旧石器にも留意が必要である。また、河川堆積層ではEn-a層上位の旧石器の混在もみられ、周囲の当該期遺跡の存在を示す指標にもなっている。

⑨ 土壌分析

層に大きな乱れのない低湿部においては、土壌分析を行うことにより、珪藻分析・花粉分析・植物珪酸体分析・種実遺体同定・昆虫遺体同定・年代測定などが進展し、樹種同定ともども遺跡の自然環境や当時の環境変化が捉えられる。低湿性遺跡調査の自然科学的側面として重要である。

上記の①～⑨は相互にリンクし合い、遺跡内と周囲や遺跡間の比較検討が生む成果は大きい。それは低湿性遺跡に限らず、総合体系として遺跡内の台地部や近隣遺跡、流域の遺跡、道央部、北海道、本州、大陸…と展開する膨大で深いデータを秘めている。

（三浦 正人）